第 221 号　　令和５年６月発行（季刊）

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行　新美南吉記念館　〒475-0966　愛知県半田市岩滑西町1-10-1　Tel. 0569-26-4888　http://www.nankichi.gr.jp

新美南吉没後80年「貝殻忌」

①「貝殻」を歌うつばさ幼稚園の園児たち
② 詩「泉」の朗読（声優・入野自由（いりのみゆ）さん）
③ ネイチャーゲームで南吉の「貝殻」詩碑を訪れる参加者（雁宿公園にて）

新美南吉は今から八十年前の三月二十二日に亡くなりました。半田市では南吉の命日を「貝殻忌」と呼んで毎年記念行事を行っています。ここ数年、新型コロナウィルスの影響で中止が続いていましたが、今年は三月十八日（土）～二十二日（水）にかけて、大々的にイベントを開催することができました。

期間中は、南吉作品を朗読や講談、琵琶の演奏などで楽しめたほか、忌名の由来となった南吉の詩「貝殻」の碑が立つ雁宿公園でネイチャーゲームを開催しました。作品に出てくる植物を探してビンゴカードを埋めたり、貝殻笛を作ったり、そうした遊びを通して、南吉を偲んでもらえたのではないかと思います。

そして命日当日には、四年ぶりとなる「貝殻忌」式典も行いました。今年は新美南吉生誕百十年です。キャッチフレーズの〝さあこの泉を汲んでくれ〟は、南吉の詩「泉」から取りました。そこでストップモーションアニメーション「ごん」で兵十役をつとめた声優の入野自由さんをお呼びし、この「泉」を朗読していただきました。穏やかでありながら、力強く訴えかけるような朗読からは、自身の作品を〝汲んでくれ〟とうたう南吉の想いが見えるようでした。

それから地元のつばさ幼稚園の園児たちが「貝殻」の歌を披露して、式典は閉幕へ。快晴の空の下、朗々と子どもたちの明るい声が響きました。

また「貝殻忌」の行事として、三月十九日（日）に新美南吉生誕百十年記念レクチャー&コンサート「音楽でたどる新美南吉の生涯」も開催しました。これは南吉のふるさと半田と彼が女学校教師として赴任した安城での連続企画です。南吉の生涯を前・後半にわけ、半田篇では幼少期～東京外国語学校学生時代までを紹介しました。

レクチャーを務めたのはピアニストの加藤希央（きお）さんです。この日は、南吉が小学校の綴方帳に唱歌「虫のこえ」「はるがきた」から着想を得た作文を書いていることや、中学に上がると童謡に傾倒して作曲にも興味を持ったこと、東京に出てからはレコード喫茶に通いベートーヴェンを好んだことなどが語られました。さらに記念館から南吉が実際に聴いた蓄音機も登場し、SPレコードの音色を楽しみました。

休憩を挟み、後半は「新美正八が聴いた音楽」と題したコンサートへ。加藤さんのピアノ、矢口十詩子（としこ）さんのヴァイオリン、高居洋子さんのソプラノで、南吉＝新美正八が聴いた音楽が奏でられました。あえて南吉ではなく本名の正八を冠したのは、加藤さんいわく、作家・南吉ではなく、一人の青年として、人々のつながりの中で音楽を聴いていたことを強調したのだそうです。それを象徴するように、演目も、南吉が中学時代によく口ずさんでいたという「叱られて」や、恋敵の家で聴いた「クロイツェル・ソナタ」など、彼の青春時代を感じさせる曲が並びました。

そして最後に、作曲家の高山葉子さんが曲をつけた南吉の詩「明日」を披露して、拍手の中、コンサートは幕を閉じました。

富安陽子×山本悦子「わたしの創作の〝泉〟」

五月二十一日（日）、児童文学作家で新美南吉童話賞の審査員でもある富安陽子先生と山本悦子先生をお招きして、対談・講演会を開催しました。（会場：雁宿ホール講堂）

講演会ではまずそれぞれの先生に、作家としてデビューするまでのお話を語っていただきました。山本先生は元々書くことが好きで、小学校教員として働く傍ら、童話賞などのコンクールに何度も応募を重ね、作家としてデビューされました。学校では子どもたちからたくさんお話のタネをもらったといいます。そのため山本先生が書くお話は学校を舞台にしたものが多いとのことでした。

一方、富安先生は自身の創作のルーツとして、家族との思い出を挙げられました。父方の家が一家揃って「ホラ吹き」で、いろんな話を聞かせてくれたといいます。富安先生も小さい頃から書くことが好きで、高校を卒業する時にご両親が自費出版してくれた短編童話集が、デビューのきっかけとなりました。富安先生の場合、夢で見た内容をお話にすることも多いそうです。

続く、そんなお二人の対談では、同じく童話賞の審査員である酒井晶代（まさよ）先生（愛知淑徳大学教授）の司会で、それぞれの創作法や童話を書きたい人へのアドバイス、聴講者から寄せられた質問をお聞きしました。

その中で印象に残ったのは「作品を仕上げるためには捨てる勇気と書き上げるしつこさ」が必要だ、という富安先生の言葉です。お二人とも特に長編作品となると、書いたものを修正したりボツにすることはしばしばだそう。山本先生の場合はまずプロットを立てるので、書き始めてから「違う」と思うことはないものの、自分が何気なく書いたものが伏線になったり、登場人物が当初想定していなかった意味を持つことがあるといいます。富安先生もそれに頷いて、創作をしていると、作者が思ってもみなかった不思議を体験できると話していました。

講演の感想には「お話が書きたくなった」という声も多く、今後童話賞への応募が増えればと思います。

童話「牛をつないだ椿の木」に登場する「井戸新」ゆかりの品と石碑を寄贈

新美南吉記念館では、7月2日（日）まで企画展「ぼくは井戸である～『牛をつないだ椿の木』考～」を開催しています。これに合わせ、童話に登場する井戸新ゆかりの品や石碑が記念館へ寄贈されました。

＊

「牛をつないだ椿の木」は、明治時代の岩滑新田を舞台に、海蔵という人力曳きの青年が街道を行き交う人々のために井戸を掘ろうとする話です。井戸新は、物語に登場する井戸掘り屋で、そのモデルは岩滑新田で井戸掘りを稼業にしていた井戸新こと、榊原新一さん（明治23～昭和59・写真①）でした。

南吉は、実感を込めてリアリティのある作品を書くために、実在の人をモデルにすることがよくありました。「牛をつないだ椿の木」の場合は、直接、井戸新を訪れ、井戸の掘り方や費用について根ほり葉ほり尋ねたと言います。その時は何のためにそんなことを尋ねられるのかわからなかった新一さんですが、後年、作品に自分が出てくると聞いて、執筆のための取材だったと気づいたそうです。

①

今回、新一さんの孫の榊原實さん（半田市・77歳）から頂いた品は、井戸新で使われていた急須や湯呑、飯櫃（めしびつ）などで、井戸新の焼き印が押されているものもあります。写真②の「はんぎり」は、冠婚葬祭時に寿司や餅を入れた木箱で、「新田」「井戸新」と大きく墨で書かれています。

②

石碑（写真③）は、新一さんが井戸掘りを始めて40年以上が経ったことを記念し、昭和38年に自宅に建立したもので、「探清泉」と、いかにも井戸掘りらしい言葉が刻まれています。字は岩滑の光蓮寺住職で南吉とも親しかった本多忠孝（ただなり）師の揮毫です。

ゆかりの品の一部は企画展で展示し、石碑は「童話の森」へ移設しました。ぜひ併せてご覧ください。

③

半田市の水、南吉と重ねて

三月、半田市上水道課と市水道指定工事店協同組合が、新美南吉生誕百十年記念ステッカーを制作しました（左写真）。南吉の詩「泉」から引用した生誕百十年のキャッチコピー〝さあ　この泉を汲んでくれ〟が、市水道事業の基本理念「安心・安全な水をいつでも、どこでも、いつまでも」と重なることから、生誕記念と水道事業の両方をPRするために作られました。

ステッカーは市公用車に貼られているほか、市指定給水装置工事事業者にも配布されました。今後、街中で見かけることがあるかもしれません。

日誌抄

三月（弥生）

▼4日「ごんぎつね」朗読リレー参加者説明会。於クラシティ▼5日「南吉さんとおやつ」。於亀崎図書館▼8日　さくら小学校で出前授業。50人参加▼18～22日　新美南吉没後80年「貝殻忌」。859人参加▼19日　レクチャー＆コンサート「音楽でたどる新美南吉の生涯」半田篇。237人参加▼23日　花園小学校で出前授業。118人参加▼26日　第188回新美南吉読書会。14人参加

四月（卯月）

▼8日「不思議の庫無本（くらむぼん）工房」紙芝居上演会。15人参加▼同日「南吉祭」。地元岩滑区の山車二輌が記念館駐車場に揃う▼9日　企画展「ストップモーションアニメーションごんの世界2023」終了。会期中観覧者数11538人▼15日　企画展「ぼくは井戸である～「牛をつないだ椿の木」考～」始まる（～7月2日）▼30日「音楽でたどる新美南吉の生涯」安城篇

記念館からのお知らせ

「ごんぎつね」朗読会＆読み語りコンサート

新美南吉生誕 110 年のメイン記念事業として、半田市内の小学生 24 人が「ごんぎつね」の朗読に取り組んでいます。南吉の誕生日である７月 30 日（日）にその成果を披露する朗読会を行い、子どもたちを指導する山根基世さんはじめ、プロの朗読家や演奏家による読み語りコンサートを開催します。

日　時　７月 30 日（日）　13 時 30 分～ 16 時 15 分
場　所　アイプラザ半田　講堂
定　員　500 人（対象：小学生以上）
入場料　500 円

※新美南吉記念館、半田市立博物館、アイプラザ半田、チケットぴあにて、チケット販売中。詳細は QR コードへ。

読み語りコンサート出演者

▲ 山根基世

▲ 松平定知

▲ 高本一郎

長野ヒデ子×長野麻子　対談講演会
お母さんと赤ちゃんの世界

「南吉と長野ヒデ子の母の世界展」開催記念！

＝南吉の詩から生まれた絵本『てんごく』＝

麻子さんから見た母・ヒデ子さんのお話や、ヒデ子さんの新作絵本『てんごく』の制作秘話などを語っていただきます。

日時　８月13日（日）　13時 30 分～15時 30 分
場所　アイプラザ半田　講堂
定員　550 名（入場無料・予約者優先）

申込みは７月８日（土）
９時 30 分から受け付けます。
◀ 申込みフォーム

© のら書店

▼ 長野ヒデ子

© 小幡崇

▼ 長野麻子

© 中山章太郎・渡辺裕子

講演会後、お２人によるサイン会があります。

第35回新美南吉童話賞　作品募集

今年も小学生から大人まで、創作童話を募集しています。ふるってご応募ください。

募集期間　９月 10 日（日）まで
賞金　最優秀賞 40 万円　ほか
※詳細は記念館 HP（右 QR コード）へ

新美南吉生誕 110 年
南吉と長野ヒデ子の母の世界展

南吉の詩「天国」の絵本化を記念し、絵本作家・長野ヒデ子が描く南吉と親子の愛の世界を紹介。

会期　令和５年７月 15 日（土）
～ 10 月 29 日（日）

© のら書店